

私と文化協会

科学と文化をつなぐ

佐藤勝昭

文化協会とのつながり

私と本会のつながりは、麻生区美術家協会創立会員としてのお誘いを受けた昭和五十九年に遡ります。NHK技研を退職し東京農工大工学部の助教に就任した年です。以前から「地域に生きなければならぬ」と考えていた私は「返事でお誘いを受けました。美術家協会は、文化協会の加入団体なので、私も美術家協会員として「女優さんを描くデッサン会」や「区民スケッチ会」に指導者として協力してきま

した。私が麻生区文化協会の個人会員になったのは平成十八年です。美術家協会会員でもある松田洋子広報部長当時から、からむしの編集を手伝ってくれないかと依頼されたのがきっかけです。からむし四十二号(平成十九年三月発行)の編集後記には、「からむしの巻頭頁は、四十号から会員の描いたスケッチとそれにちなんだ文を掲載している。本号は、会員なられたばかりの佐藤勝昭さんにお願いた。佐藤さんは美術工芸部と広報



部に所属。」とあります。

図は、からむし四十二号の巻頭頁です。絵は岡上山東光院の山門を横から描いたスケッチです。区民スケッチ会の際に描いたものです

文化協会のIT化

からむし四十二号が出た平成十九年は、東京農工大学副学長を退任しJST(科学技術振興機構)の「次世代デバイス」プロジェクトの研究総括になった年です。本会との係わりが私の仕事の節目に一致しているのは興味深いことです。

その年の文化協会総会に出席した私は、「文化協会はすべてが紙ベース、連絡も手紙かFAX。文化祭総合パンフもとと電子化すれば安くなるはず。ホームページもない。IT化すべきではないか」と質問しました。

後で聞いた話ですが、年配の役員は、電子化に抵抗を感じる方が多く、とんでもない奴が文化協会に入ったなど困り顔だったそうです。

そんな私が本会の役員会の総務に指名されたのは平成二十年度総会でした。その年から、私は、本会のIT化に取り組みました。私のWEBサイトを使得勝手に麻生区文化協会のホームページを制作し今も運用しています。また、秋の文化祭の総合パンフレットを、電子的にデザインし、印刷所にネット入稿するやり方で大幅にコストを抑え、かつカラー化することができました。また、役員会の議事要旨総会議案書・七草粥チラシなど、着実にIT化を進めています。



アルテリツカ新ゆり美術展と私

平成二十年アルテリツカしんゆりが始まりましたが、音楽・演劇中心で美術はありません。そんな折、菅原会長の働きかけが実つて、新百合21ホールを美術館仕様にして美術展示ができる運びになりました。

元会長の故杉本長治さんから、美術家協会と文化協会で平成二十二年春に美術展をやらないかとの電話がありました。私は、美術家協会事務局と文化協会の総務を務めていたので橋渡しとして両会に働きかけました。そして、第一回実行委員会が平成二十年十一月八日に開催され、私が委員長に選出され、名称を「新ゆりプレ芸術祭美術展」とすること、川崎市文化財団に共催申請をすること等が決まりました。

オーピングパーティーで来賓の寺尾川崎市文化財団理事長(当時)は、次回から会場費を全面的に財団が負担すると約束してくださいました。

平成二十二からは、正式にアルテリツカしんゆり芸術祭のプレイベントとして位置づけられ、「アルテリツカ新ゆり美術展」となり、今年で七回目を迎えました。

夏休み親子教室と私

夏休み親子教室は本会の重要なイベントの一つです。親子教室は毎年、十五〜二十教室が開かれますが、理科は多くありません。平成二十年は「測る」二十二年は「しぜん発見」の教室が開かれましたが、二十三年には理科がなかったのです。

二十二年三月三日から八日に開催されたこの美術展は千六百名を超えるお客様にご覧頂き大成功でした。会場費は、半額を美術家協会と文化協会が負担しました。



私は、親子教室校長(当時)の千坂さんから平成二十四年度の理科を担当するよう依頼されました。折しも、私は前年東日本大震災の年に「太陽電池のキホン」を出版していたので太陽電池をテーマにしてはとのことでした。応用物理学会で中高生向けの理科教室を担当した経験がありましたが、小学生を相手するのは初めてです。フェイスブック友達で科学コミュニケーターのNさん(多摩区在住)に相談したところ、プラモのソーラーキットを特

別価格で売って頂ける理科教材会社を紹介してくださいました。Nさんは教室のサポーターも引き受けてくださいました。子どもたちは熱心にソーラーカーを組み立て、屋外で太陽光を受けて走らせて遊びました。

三年間ソーラーカーをやりましたが、平成二十七年理科教材会社が倒産。それ以来JST科学コミュニケーションセンターのTさんの協力で「スマホ顕微鏡」に取り組んでいます。

このように私の担当する親子教室は科学コミュニケーションの仲間に支えられているのです。

地域交流のひろがり

川崎市総合文化団体連絡会(総文連)の会誌「文化かわさき」の編集委員や、かわさき市民芸術祭美術部門の委員を経験し、日頃顔を会わすことのない川崎南部中部の方々と同じ合うことができたのも、文化協会のおかげです。ただ、平成二十八年からは、市民芸術祭美術展の案内はがき、パンフレットの作成を担当するというおまけ付きですが。

文化協会主催のデッサン会には、黒川に稽古場がある劇団民藝の女優さんが舞白衣装でモデルになってくださっています。デッサン会終了後には、女優さんとお茶の会があります。そこ

で知り合った女優さんが、出演されるお芝居に、メールやフェイスブックを通じて誘ってくださいます。仕事帰りなどに時間を見つけて芝居小屋に出かけるのも楽しいものです。

これからの文化協会

平成二十九年年度総会の後の懇親会で、昨年まで役員だった方が「私が利用している麻生市民交流館やまゆりは団塊世代の会員がどんどん増え、自発的な活動も盛んです。これに引き替え文化協会は入会者が多くありません。やはり、日頃集えるたまり場があるとなじみの違いでしょうか。」と話しておられたのが印象的です。

麻生区には、大学や研究所を経験した科学者、技術者で文化的素養をお持ちの方もたくさんお住まいです。そういう方々に加わって頂ければ「あたらしい風と創造」がさらに前進するでしょう。このためにはIT環境の整った独自の活動の拠点が欲しいものです。

麻生区文化協会 平成二十九年年度総会

平成二十九年四月十五日(土) 麻生市民館 大会議室

平成二十九年年度麻生区文化協会総会は、当日七〇余名の参加者をもって開催された。

吉田功副会長の開会のことばに始まり、次第に沿って滞りなく進められた。

まず、菅原会長挨拶では、この二年文化協会では「あたらしい風」を目指してさまざまな行事が行われたことへの感謝が述べられた。新年度は、創立三十周年記念事業でのキャッチフレーズ「あたらしい風と創造」も四年目に入るのだから一歩すすめたい。「あさお古風七草粥の会」は、麻生の正月の風物詩としてすっかり地域に定着した。二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックには外国の方が見える訳で、日本を世界にアピールする良い機会。麻生区には七十一カ国、二三人の外国人が在住。そこで、今後日本の伝統行事の七草粥に参加していただき、共に楽しんでもらうなど、これからの活動には、グローバルなパートナーシップが求められる時代であると熱く語られた。

表彰式では、麻生区文化祭奨励賞を白井爽風さんと橋本周さんが受賞された。

白井さんはアカデミー部に所属し本会の主要事業の一つである「俳句大会」

などの企画運営に永きにわたり携わり、選考実行委員として尽力された。橋本さんは、本会の役員・総務として、文化祭をはじめ様々な行事や活動の推進に手腕を発揮し、牽引力となっている。また、俳句大会では選考として尽力された。

麻生区文化振興賞を千坂隆男さんが受賞された。

千坂さんは本会の役員として、総務や副会長を歴任し、企画運営に尽力された。また、「夏休み親子教室」には卓越した手腕を発揮し、地域の文化振興に寄与された。

来賓挨拶では、北沢仁美区長より文化協会の活動は素晴らしいとの評価を頂き、中でも「古風七草粥の会」に外国の方をお招きしようという会長の提案は「あたらしい風」にふさわしいと期待を述べられた。行政では「地域包括ケア」を掲げ、市民が豊かな環境を享受できるように努力している。高齢者が家にこもらず元気に文化活動に参加出来るような、地域をまき込んだ文化協会であって欲しいと結ばれた。

三枝正孝市民館長からは、文化協会には市民館を大いに活用していただき、麻生区の芸術、文化活動の中心的役割

を果し、地域文化の創造と発展に貢献されていると評価を述べられた。また、市民館の大規模改修に伴い十一月から来年三月まで大ホールの使用ができませんが、施設を長く使うための措置であるからと理解を求められた。

議事では、小田島寛さんが議長として選出され、事業報告、決算報告、会計監査などが満場致拍手をもって承認された。また、二十九年年度の事業計画及び予算案についても満場致で拍手をもって承認された。

最後に、横須賀朝子副会長より閉会のことばがあり、終了となった。尚、総会の詳しい記録は総会報告として本誌と共に送付いたします。

(文責 総務)

